
ローリングール ―転がる少女―

火野村祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ローリンガール ― 転がる少女 ―

【Nコード】

N5087S

【作者名】

火野村祭

【あらすじ】

これは転がって転がって転がり続けた、とある少女のお話。

1（前書き）

こ、こんにちは！火野村祭です！

今回はwowaka様の名曲『ローリングール』を自己解釈させていただきます。

あくまで自己解釈なのでそこはご了承下さい。

なおこの物語は主にシリアス・いじめなどの表現があります。苦手な方はご注意下さい。

少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

「ごめんね桜さん。来月から、他の親戚の家に行ってもらうことになったわ」

申し訳ないという表情を取り繕った顔。その奥にある感情を私が知らないとも思ってるんだろうか。

…ほっとしている。

やっと厄介な邪魔者が消えるって思っている。

余計な気を使わないで済むって思ってる。

やっと不気味な女がいなくなるって思ってる。

私は、誰にも必要とされてない？

ただ目の前の、遠い遠い親戚の言葉に頷きながら思った。こんな言葉に頷くのはこれで何回目だろう。いつからか、もう数えてもいなかった。

私はなんで生きてる？

ぐるぐると回る思考。ずきり。理由もわからないまま、胸が痛んだ。問題ない、と、自分を落ち着かせるように、呟いた。

*

「はじめまして。本田 桜と申します」

どうぞよろしくお願いします。

もうこれまでに何度同じ台詞を言ってきたんだろう。

慣れすぎてしまった——慣れたくなかった——転校、初日。今回の転校でも、私は孤独のままなんだろう。

ずっと愛してほしかったはずなのに、それを忘れてしまったのはいつからだっただろう。

指定された席に座って、授業の用意をただ淡々と行う。

隣の席の人や前の席の人がチラチラとこちらを見てくるのがわかる。それが少し不快だった。

…ああ今回も、どうか“何事も”ありませんように…。

*

「Hello！俺はアルフレッド・F・ジョーンズだよ。よろしく！」

私の願いも虚しく、どうやら今回は何事もないままでは終わらないらしい。私は思いつきり嫌な顔をした。

休み時間になり、隣の席にいた金髪に眼鏡の男が——どうやらジョーンズと言っらしい——私に話しかけてきたのだ。

こういうタイプは正直嫌いだ。

明るくて、元気で、きっとクラスの人気者で、きっと異様にモテる奴。

私なんかには構わなくていいのに。馬鹿みたい。

「ねえ君どうして転校して来たんだい？前の学校ってどこだったの？あ、彼氏とかいる？」

「…質問は1つずつして下さい。転校の理由はちょっとした事情があるんです。前の学校は隣の県にある水ノ谷高校でした。彼氏はいません、欲しくありません」

ため息まじりに、質問に答える。あからさまに嫌な顔をしてやったのに、ジョーンズは顔色ひとつ変えない。それがすごくムカついた。

「ねえ君さ、俺と友達にならない？」

明るい声でそう言われた。そんな言葉聞いたのは、一体いつぶりだっただろうか。

でも、もう今更。友なんていらぬ。愛なんていらぬ。私は下唇をかんだ。

「…結構です」

「どうしてさ？」

「……私なんかと関わらないほうがいいですよ」

本当は、私があなたと関わりたくないのだけれど。

そんな私の真意など全くわかっていないらしいジョーンズは、ただ眉をひそめた。そして私に再び話しかけてくる。

もう放っておいてほしい。私は窓の外を見て、無視を突き通した。

これが私とジョーンズの出会いだった。

2 (前書き)

2 話目です…。

次の日、ジョーンズはまた私に話しかけてきた。

基本静かで陰気な雰囲気を放っているせいか、ジョーンズ以外の人
はまったく話しかけてこないけれど。

でもジョーンズひとりだけでも、十分煩くて、うざったかった。

話しかけてくる内容は、他愛もないことばかりだった。

好きな食べ物はないとか、駅前のハンバーガーショップは知って
るかとか、雑誌とかは読むのかとか、音楽はどういったものを聞く
のかとか。基本は質問だった。だけど私は無視を突き通した。答え
るのが面倒だったし、嫌だったから。

その次の日も、ジョーンズは私に話しかけてきた。

その次の日も、次の日も。

ただただ私は無視を突き通した。会話したのは、最初だけだ。

転校してきてから4日目くらいに、ジョーンズのとりまきと思われ
る生徒数人が、明らかに私に聞こえるように私の悪口を言っている
のを聞いたこともあった。

もうそんなの慣れてしまっていたから、私は別に気にしなかった。

けど、ジョーンズが「なんでそんなこと言うんだい」と言ったから、
さすがに驚いてそちらを向いてしまった。人それぞれ個性があるも
のだろ、なんて言葉が続いたから私はただ驚愕して目を見開いた。
なにも言えなくなっているとりまきに笑顔を向けるジョーンズの存
在が、ただ不思議で仕方がなかった。

なんで私なんかをかばうんだろう。どうして私なんかに構うんだろ
う。

不思議で、わけがわからなくて、ただただ私は驚愕したままだった。

＊

「なんで私なんかに構うんですか」

転校してきてから1週間と3日たった日。飽きずに話しかけてくるジョーンズをにらみつけながら、私は聞いた。ジョーンズは少しだけ驚いてから、にこりと笑った。それにイラッとしてしまったのは、言うまでもないだろう。

「君のことが好きだから、かな？」

その言葉に、ほんの少しだけ驚いて、それから呆れた。馬鹿言わないで下さい、と言えばジョーンズは笑った。

『好き』なんて、私にはただどうでもいいことだった。

「桜は恋愛したことないの？」

「……小さい頃、両親を亡くしてそれからずっと親戚をたらい回しです。恋愛なんてする暇ありません」

桜、と馴れ馴れしく呼ばれたことに不快感を覚えながらも、そう答えた。さらつとすごいこと言うね君、というジョーンズの小さな声が聞こえる。

他人にとっては驚くことかもしれないけれど、私にとってそれは普通のことだから別に気にしないけれど。

「ジョーンズさんはさぞ恋愛経験豊富なんでしょうね」

「アルフレッド」

「はい？」

「アルフレッドって呼んでくれよ」

に、と笑うジョーンズに、呆れてしまった。この男は、ずいぶん子供っぽいなあと思う。

ただのお望みなら呼んでやるのが礼儀というもの。アルフレッドさん、と言葉にすると、そいつは満面の笑みをこちらに向けてきた。

「ほんとうはさん付けとか敬語とかもやめてほしいんだけど、まあ許容するよ。」

… やつと一歩つてとかな？」

「はい？」

「なーんでもない」

笑うジョーンズに、もう話す気にもなれず視線を反対方向に向けた。はあ、と溜息をつく。自分から人に話しかけるなんて、私は何をしているんだろう。

「みーつけた！」

その明るい声に顔を上げると、案の定扉のところにはアルフレッドが立っていて、私はため息をついてしまった。

「屋上で一人でお昼なんて、変わってるね桜は」

「…どうして来たんですか？」

「そりゃあもちろん、君と一緒に昼食べたかったから」

そう言つてアルフレッドは私にファーストフードの紙袋を見せた。友達から逃げてくるの大変だったんだぞ、とアルフレッドはさも当たり前のように私の隣に座った。私は食べ終わったあんパンの袋を握り潰して——ちなみにあんパンは購買で買った——カフェオレのパックをひつつかむと、付属のストローを突き刺した。

「なんでアルフレッドさんみたいな人が私なんかに構うんですか？」

「だから言っただろ？君が好きだからさ」

「御冗談」

「冗談だと思うかい？」

「冗談であつてほしいとは願っておりますが」

パックに刺さったストローを吸い、カフェオレを飲む。いつもと違うメーカーのものだからか、あまりおいしいとは思えなかった。

はあ、と今日何度目か分からないため息をつく、ハンバーガーを頬張りながらじつとこちらを見てくるアルフレッドに気づく。なんですか、とぶつきらばうに言えば、いや、とアルフレッドは口の中ものを飲み込んだ。

「…君って、さ。なんかすごく、なにかもがどーでもいいって顔してるよね」

その言葉に、すこし、目を見開く。この男がそんなことを言い出すとは思ってもみなかったからだ。

「…そうですか？言われてみれば、確かにどうでもいい、かもしれませんねえ」

この世界は全く私の望みを聞き入れてくれないから。思い入れなんてなにもないこの世界は、確かにどうでもよかった。なんでそう思うの？とアルフレッドが聞いてくる。なんだかおかしくて微笑むと、そうですねえ、と私は質問に答えた。

「転がってるから、でしょうか？」

「転がって、る？」

「転がっているみたい、と言ったほうが良いのでしょうか。」

毎日毎日ぐるぐる思考が回って、わけがわからなくなっ、まわりはなにも見えなくて、こんな悲しかったり辛かったりするのに、終わりは見えない。

まるで永遠に続く坂道を転がっているみたいでしょう？」

私は笑った。アルフレッドは一瞬だけ——本当に一瞬だけ——悲しい顔をして、そうだね、と微笑んだ。

「あ！じゃあさ、俺がこれから毎日聞いてあげるよ」

「……………はい？」

「もう転がってないかを、さ。」

もしかしたら転がってないのに気付いてないだけかもしれないし。
とアルフレッドは、言う。

おかしい人だなと思って、また笑ってしまった。
それから一気にカフェオレを飲み干してパックを潰すと、ゴミが回収されるのかよくわからない、さびれたゴミ箱にゴミを投げ入れた。
立ち上がり、制服のスカートを直すと、もうすぐ昼食を食べ終わり
そんなアルフレッドのほうを見た。

「では、お先に失礼します」
「うん」

最後の一口になったハンバーガーを口に放り込んで、アルフレッドは返事をした。アルフレッドに背を向けて扉のほうへ歩いていく。
すると、桜！と呼ばれて、振り向いた。

「笑った顔のがかわいいよ！」

につ、と笑うアルフレッドに、また、ため息をついた。
ほんと、おかしくて、馬鹿みたいな人だ。

4 (前書き)

4 話です

それからアルフレッドは毎日、お昼を私と一緒に食べるようになった。

ハンバーガーを頬張りながら彼が話すジョークまじりの話が面白くて、つい笑ってしまいうことも少なくなかった。つまり、私は笑うことが増えた。

昼休みの屋上。

2人だけの時間。

両親が亡くなってからはじめて、「楽しい」と思えた時間だった。

だんだんと仲が良くなっていく私とアルフレッド。私の口数も自然と多くなり、2人で笑い合っている時間も多くなっていった。

でも、それをよく思わない奴も、いるわけで。

*

「痛っ」

反射的に手をひっこめた。痛みが走った指先を見ると、赤い血が出ていた。

何だろうと思って先程手に持ったノートを見てみると、カミソリの刃らしきものがのぞいていた。

「（どうしたんだい桜？）」

「（いえ、大したことではないのでご心配なく）」

小さく声をかけてきたアルフレッドにこちらも小声で返し、机の横にかけたままの鞆から絆創膏の箱を取り出す。

切れている部分に絆創膏を貼り、ゴミを箱におしこむと、すぐその箱をかばんにしまった。

カミソリの刃は危ないので、後で捨てておこうと机のはじっこに置いておく。さすがに今は授業中だから、席は立てないし。

しかし、カミソリの刃がノートに仕込まれていたということは、これはおそらく、いじめのはじまりだな、と、思う。

きつとこれからだんだんエスカレートしていくのだろう。

いじめを受けるのは初めてではないから別に大丈夫だけれど——こんな私はやっぱりおかしいのだろう——些か面倒だ。

そう考えていると、かさり、と一枚のメモ用紙が机に置かれた。ふ、と横を見ると、アルフレッドの顔がこちらを向いていた。

「（もういいかい）」

ぱくぱく、と口パクでアルフレッドは言う。机に置かれたメモ用紙にも、そう書いてあった。

そういえば今日は聞かれていないなと思い出す。あの初めてお昼と一緒に食べたとき、宣言したことはどうやら本気だったようで、毎日聞いてくるのだ。私が転がっていないかを。

「もういいかい」と。

他の人から見たら、わけがわからないだろう。

私はほんの少しだけ苦笑すると、机に置かれたメモ用紙にシャープペンで言葉を書き足し、す、とアルフレッドの机に置いた。そしてアルフレッドの顔をまっすぐに、見る。

「……………（まだですよ）」

ぱくぱく、と口パクで、伝える。紙に書いた言葉も、一緒に。まだ、私は転がる。

「（まだまだ先が見えないので）」

口パクでそう付け足してから、また、苦笑した。そしてアルフレッドはまたあの悲しい顔に一瞬だけなって、机に置かれたメモ用紙をくしゃくしゃと丸めた。

いつまで君は転がるの？

そうアルフレッドの唇が動いたのは、見なかったことにしておこう。

5（前書き）

5話です。

長ったらしくてすみません。

いじめはさらにエスカレートしていった。

ノートは破かれるし、時折濡れていたりもするし、教科書はなくなるし、筆箱にゴミが大量に入っているし、鞆は傷だらけだし、

下駄箱に鳩の死骸が入っているし、上靴は暴言の落書きで汚れているし。

直接的暴力とかはないけれど、物が使えなくなったりするのは、結構精神的に、くる。

居候先の親戚に新しい物を買ってもらうわけにもいかないし、お金がないから自分では買えないし、私はとにかく堪え忍んだ。

そして今日は、唯一無事だった机や椅子までもが、被害を受けていた。

「……………」

ペンで書かれた暴言、彫られた暴言、傷。

そんな机と椅子を見て呆然とする私へ向けられる視線が、嫌だった。くすくす、教室の隅から聞こえる笑い声。そちらのほうを向けば、女生徒の3人組がこちらを見て笑っていた。

あいつらが、主犯は。

「……………ひどい、ね」

後ろから声が聞こえてきて、振り向く。アルフレッドの、眉をしかめた顔が、そこにはあつて。ぎゅ、と拳を握って、唇を噛んだ。

「……ねえ桜、先生に言おうよ。助けてもらおう」

ひどいことになっている私の机に触れて、アルフレッドはそう言った。

けど、先生に言ったところで解決なんてしないし、むしろひどくなってしまうのは明らかだと思う。経験したことだ。もしかしたら直接の暴力とかに一気にエスカレートするかもしれない。

……放っておいても、最終的にはそうなるとは、分かっているけれど。

少しでも後のほうが、いい。

それに、大事にはしたくない。

「……私は大丈夫ですから、いいです」

「大丈夫、って、でも！」

「いいんです。慣れてますから」

「っ……」

アルフレッドは傷ついたような、驚いたような表情をしてから、またあの悲しい顔に、なる。

貴方が悲しむ必要は、ないのに。

「……慣れたくは、なかった、ですけど」

小声で私がそう呟くと、アルフレッドは唇を噛んだ。

私は席に座ると、何事もなかったように授業の用意をし始める。

「……ねえ。桜」

「はい？」

顔を上げると、立ったままのアルフレッドが私を見つめていた。その強い瞳に、なんだか、泣きそうになってしまった。

「…俺は、君の、味方だよ」

そう言われて、固まってから、こくり、頷いた。

こんなこと言われたのは、はじめて、かもしれない。
ああやばい、泣きそうだ。

「…もういいかい？」

「…まだですよ」

まだ、まだ、私は転がる。

苦しい。

哀しい。

止めてほしい。

止めてほしくない。

助けてほしい。

助けてほしくない。

回る。転がる。私は今日も転がる。

にじんだ涙がこぼれないように、そっと拭った。

ばしゃあ。

ぽとぽと、トイレの床に、雫が落ちる。

見上げれば、ひっくり返って雫を垂らすバケツと、それを持った笑う女子生徒が見えた。

いら、として、眉をしかめる。キャハハハ、と聞こえる笑い声。あいつらだろう。

私はばん、と勢いよく個室の扉を開けた。

びくつ、と反応する3人を尻目に、私はすたすたとトイレを出ていった。びしょ濡れだが、そんなことは別に気にしない。

ああ、くつつく服や髪がうつつとうしい。

廊下ですれ違う人が驚きの目で見てくるのも気にせず、私は教室へ。そして、苛立ちに任せてばん、と扉を開いて、すたすたとアルフレッドへ——自分の席へ、でもある——近付いた。私の姿を見て目を見開き口をぽかんとあけているアルフレッドに、ずい、と手を出す。首を傾げるアルフレッドに、私は口を開いた。

「タオル。貸して下さい。」

貴方バスケット部でしょう？今日練習あったの知ってますよ。タオルくらい持つてるでしょう」

「え……い、いいけど

汗くさいよ？」

「そんなことはどうでもいいですから。早く貸しなさい」
「う、うん」

そう返事をする、アルフレッドは自分の鞆からタオルを取り出して、差し出した。ありがとうございます、と形だけの礼を述べて、私はタオルを受け取り、頭へ被せる。

「ねえ、どうしてびしょ濡れなのさ？」

「……もとはといえば貴方のせいなのですが」

髪をがしと拭きながら、じと、と睨みつけると、アルフレッドはたじろぐ。

はあ、とため息をつく、濡れた服を叩くように拭いた。

幸いスカートや下着はほとんど濡れていないようで、座るには問題なさそうだ。これからまだ授業があるし、今日は着替えるものもない。

しかし肩や髪は思いつ切り濡れていて気持ち悪かった。少し、いや、かなり寒い気もする。時期が時期だし、風邪を引いたらどうしてくれるんだろうか、あの3人は。

「俺のせいなら謝るよ、桜」

「結構です。確かに元凶は貴方ですけど、貴方から謝られても何とも思いませんから」

再び髪を拭いて首を拭いて、飛沫が飛んだ足を拭く。タオルを簡単に折り畳むと、ありがとうございます、と言ってアルフレッドに突き出した。

タオルを渡したのを確認してから席に着き、最悪です、と悪態をついた。

ちらり、横を見れば、困惑したアルフレッドの顔。再びため息をついて窓の外を見ると、私は思い切り顔をしかめた。

発端は、アルフレッドだけれど。何故か、アルフレッドのせいだ、
と言いつけることができない。
こんな思ひは初めてだった。

ああ、なんだろう。

ほんと、転がってる。回ってる。

ざわざわと煩い昼休みの教室。昼食が早めに終わった私は、自分の席に座って窓の外を見ていた。

窓の外は曇天の世界。灰色の世界。まるで私の心みたい。色はない。幸せな色は。

不幸の色ばかりで、幸せの色ばかりの“向こう”には届かない。私はため息をついた。こんな毎日毎日ため息ばかりついているから、幸福はやってこないのだろうか。

「さーくら」

呼ばれて、振り向く。そこには微笑むアルフレッドしかいなかったから、私は視線を窓の外に戻した。

ひどいことになったままの机を抱きしめるかのように、腕を伸ばし机に突っ伏す。なんだか頭痛がした。まるで、なにかすごく悪いことが起きる前触れみたいに。

「ねえさーくら」

「…なんですか。」

「こっち向いてよ」

「…いやです」

私の視線は窓の外に向いたまま。ああ雨が降ってくるだろうか。傘は持ってきていないから、きっと濡れてかえるのだろう。

私には、それがお似合いかもしれない。

「…いつそ雨が私を溶かしてくれたらいいのに」

「何意味不明なこといつてるんだい」

「あなたに言われたくありません」

いつも私に意味不明な質問を投げかけてくるくせに。そう思いながら、教室内の声が大きくなったことに苛つく。

ああもう頼むからやめてほしい。

毎晩毎晩、ここで聞こえた声が頭の中で反響して重なって、混ぜ合わさって混ぜ合わせておかしくなるから。

そう思っても、クラスメイトは私のことなど何一つ知らないから無理だけれど。

「……ねえ桜。思っただけど、なんで君はそんなに卑屈なんだい？」

「……嫌な思い出があるから、ですかね」

また質問だった。アルフレッドは質問が多い。

……嫌な、思い出。

嫌、というか、悲しい、というか。悲しいなんて生ぬるいものではないけれど。

辛くて、憎くて。今でも私に重苦しくのしかかる、そんな記憶。そりゃ、卑屈にもなるだろう。

「嫌な、ね……」

「はい。悲しくてひどい記憶です」

「……そう。」

少しの間。窓の外では雨が降り出していた。

ああ今日は濡れて帰るんだろうな、と思った。

「……桜ってさ。笑ってる顔、かわいかったよ」

「……はい？」

突然の台詞に、ついアルフレッドのほうを向いてしまった。アルフレッドの瞳は、私の目を、…心を、見つめてくる。胸の奥が、ざわつくのがわかる。

「俺は桜に卑屈になつてほしくないんだよね」
「……………っ?」

前髪を掻き上げるアルフレッド。言葉の意味がよくわからなかった。胸のざわつきがやまなくて、私は動きを止める。ね、だからさ、とアルフレッドは言う。にこりと笑ったアルフレッドに、胸のざわつきが大きくなった。

「悲しい、嫌な思い出は忘れてさ。もっと笑おうよ。そのために俺もできることがあつたら協力するから」

私は目を見開いた。

胸の奥がざわめいた。

心臓がドクリと大きな音を立てた。

……忘れる?

過去の記憶を?

あの、私をずっと縛り続ける記憶を?

ぎり、と歯をくいしばった。

気がついたら、私はアルフレッドの胸ぐらをつかんでいて。そして次の瞬間、私はアルフレッドの首を締め付けていた。

がたがたがた、机や椅子が倒れていく。
きやあああ、と周りの生徒の音がする。

そんなことは気にしない。気にならない。

私はそのままアルフレッドを床に押し倒した。

「人の気も、知らないで……!!」

だん！ アルフレッドが倒れて、大きな音がする。

私はアルフレッドの腹にまたがって、体重をおもいつきり手にかけた。

首を容赦なく締め付けられたアルフレッドは、苦しそうに顔を歪めている。

「私が……！どれだけ……！辛かったか……！どれだけ……！悲しかったか……！」

あなたには分からない……！」

ぐぐ、と手に力を込める。

脳内では過去の記憶が次々と浮かんで消えていった。

いじめられたことなんて何回もあった。無視なんて当たり前だった。いつも孤独だった。誰にも知られずに泣いていた。

「忘れてたくても忘れられないんですよ……!!」

体に残った傷跡が。

心に残ったつらい感情が。

記憶の忘却を許してはくれなくて。

あのころ言われた暴言や、形だけの同情の言葉が、私の頭の中を掻き回して掻き回して、消えてはくれなくて。

涙が溢れる。アルフレッドの顔に静かに雫が落ちる。

目の前の蒼い瞳は苦しいと告げながらも、私への暖かい気持ちが見えていて。

にくらしくて、

ほんの少し、愛しいと思ってしまふ自分が嫌で。

「あゝ ああああああああああー!!」

私はわめいた。泣き叫んだ。

後ろから教師たちが私の腕を掴み、アルフレッドから引き離れたことなんて全く気にもとめずに。

ただわめいてわめきちらして、拳句の果てには力尽きて床に崩れ落ちてしまった。

本気で、もうなにかもがどうでもよくなってきたのは、このときからだった。

*

「あ、おは…」

よ、と振り返ったアルフレッドの言葉が、動きが、止まった。それもそのはず、私は今傷だらけだからだ。

殴られた跡、擦り傷、ひつかき傷などにガーゼや絆創膏を貼った顔は、相当ひどいものになっているだろう。

「ちよっ…どうしたのその傷！？誰にやられたの！？」

「…私をいじめている3人ですよ」

席に座りながら、そう答える。机に落書きや傷が増えていた。そのうち壊されるのではないかとも思えるくらいだ。

アルフレッドは、つい昨日あんなことがあったばかりなのに、全然気にしていないみたいだ。

「大丈夫？」

「…大丈夫に見えますか？」

「うん、見えないね」

未だ少し、殴られた跡が痛む。ガーゼに触れてみると、なんだか懐かしい悲しみが沸きあがって来た。

あの3人にやられたのは、昨日の帰り。

あの3人はどうやらアルフレッドが好きらしく、アルフレッドに気に入られていたかと思えばアルフレッドの首をしめる、そんな私に憎しみを抱いたらしい。

人気のない倉庫跡のようなところに連れていかれて、殴られて、蹴られて、踏み付けられて。学校指定のローファアの靴裏は思ったより硬くて痛かった。

抵抗する気にもなれず、ただ痛みに耐えていたら、いつのまにか3人はいなくなっていて、倉庫に私一人が残されていた。

痛む体を引きずって、居候先にそのまま帰ったら、形だけの同情をする親戚が私を迎えた。奥に隠した迷惑そうな表情が私に見えてい

ないと思っているんだろうか。

はあ、と静かにため息をつく。目をつぶる。暗闇が心地好いと思っ
てしまう。ぎゅ、と拳を握った。手が震えている。

問題ない、と自分を落ち着かせるみたいに、呟く。胸が痛くなった。

「…桜」

「なんですか」

「ごめんね」

「なんであなたが謝るんですか」

「…なんとなく」

「ふざけてるんですか」

「…ごめん」

私は腕に顔を伏せた。暗闇。

アルフレッドはきつとまたあの悲しい顔をしてるんだろう。

アルフレッドが悲しい顔をする必要なんてないのに。

私と違う、綺麗な世界で笑っていればいいのに。

何故か涙が溢れてきて、気付かれないように静かに泣いた。

「…桜」

名前を呼ばれて、さらに涙が溢れてきた。…泣き止むって、なんだ
ろっ。

「…もういいかい？」

…私は唇を噛んだ。

「…もうすこし」

なんとか、声を発する。なんとなくアルフレッドがおどろいているだろうと分かった。答えが、変わったからだろう。

「…もうすぐ、なにか、見えるだろう。」

独り言のように、そう言った。

涙が溢れた。声を出さず、泣き続けた。

そう、

もう少しで、何かが、見えるはず。

転がる先が、見えるはず。

ふらり。街を歩く。

ゆらり。視界が揺れる。

ずきり。体が痛む。

いじめはどんどんエスカレートして、私の体はぼろぼろだった。

不幸中の幸い、金銭の要求等はなかったし、アルフレッドが慰めてくれたし、私の代わりに怒ってくれた。

だけでもうだいぶ精神が崩壊し始めてきた。

いつもよりいじめがひどいせいで、いつもより滞在期間が長いせいだ。

もうそろそろ4ヶ月になる。来たのは秋のはじめだったのに、もう冬になっていた。

いつもは2ヶ月くらいで音を上げられ3ヶ月で次の所に行くのに。

人が流れていく道をふらふらと歩き続ける。ほんとうは居候先になんて帰りたくないけれど。

ふと通った電器店の前。夕方のニュースが流れるショーウィンドウの中の薄型テレビ。

ニュースではどこか遠い学校の子生徒が自殺したニュースが流れていて、ふ、と思った。

そうだ。

死んでしまえば楽になる。

なんでこんな簡単なことが分からなかったのかと自分を嘲った。

テレビの中では自殺した女子生徒の母親が涙を流していた。

*

とんとんとん。

階段を上がつていく。

がちやり。

扉を開ける。

ひゅおお。

風が吹き抜ける。

私が転がる先は、
ここだったんだ。

はじめからこうすればよかったんだ。

私は誰にも必要とされてないもの。

私なんか生きてる意味ないもの。

私なんか消えてしまえばいいもの。

す、と柵に手をかける。塗装の剥がれかけた金属の固まりは、とても冷たく感じた。

きーんこーんかーんこーん…。

チャイムが鳴る。

5限目のはじまりのチャイムだ。

私にはどうでもいいけれど。

ぐ、と手に力をこめた。
さあ、

息を、止めよう。

…ばん!!

扉が開く音。

「桜ー？」

私を呼ぶ声。

振り向けば、そこには彼。

「授業始ま…

……………桜？」

首を傾げる彼。

なにしてるのさ、と問う彼。

なんであなたはこういうタイミングで
来るんですか。

ふう、と息を吐く。

「アルフレッドさん」

少し大きめの声で、言う。

「さようなら、ですよ」

にこり、笑う。手に再び力を込める。

彼が目を見開いて、全てを悟ったようだ。

私が柵を乗り越えようとするのと、彼が走り出すのは同時だった。

が、と両腕を掴まれる。柵の上から引きずり下ろされる。

ぶん、と両手を振る。アルフレッドには離す気はないようだ。

「離して、離して下さい！」

「離さない！」

「わ、たしはっ！私はっ、死にたいんです！」

私なんか、生きてる意味なんてないんです！！」

私は泣いていた。泣きながら、両腕をつかむ大きな手を振り払おうと必死で抵抗した。しかし、やはり一向に離してはくれない。

そのうち抵抗に疲れた私は、だらんと手から力を抜いた。

「……どうして死なせてくれないんですか。」

呪詛の言葉を吐くように、低く、強く、そう言った。

胸が苦しくて頭が痛くて息がまともにできなかった。

「なんで私なんかに構うんですか。
ほおっておけばいいじゃないですか。
他の人みたいに冷たくすればいいじゃないですか！
もう疲れたんです私は……っ！」

ぼろぼろ。こぼれる涙。

両腕を掴まれたままだからぬぐうことができずに、涙はそのまま屋上のコンクリートに落ちていった。
ぱたりぱたり、涙がコンクリートを濡らしていく。

「どうして……！どうして……！？」

世界は理不尽です！！私が、愛してほしいときに愛してくれる人はいなくて！！笑いたいのに傷付けて！！生きたいのに希望がなくて！！

それなのに、死にたい時に死なせてくれない！！」

私は叫ぶ。涙は止まらなくて、ぬぐえないから濡れた顔が冷たい。首を横に振る。世界を否定するように、ずっと。

嗚咽を上げる。もう私の顔はぐちゃぐちゃになっているだろう。もう嫌だ。ム力つくほど晴れた空は、世界は、すごく残酷な気がした。

ぐい、と手をひかれる。くるりと体が後ろに向いたかと思えば、何故か私は抱きしめられていた。

目を見開くと同時に、ぎゅ、と抱きしめる力は強くなる。

アルフレッドが、私を、抱きしめていた。

「…アルフレッド…さん？」

「ごめんね」

「え？」

「ほんと、ごめん。君のこと何も分かってなかった。でも言わせて。俺は君を愛してる」

どん。

私はアルフレッドを突き飛ばしていた。

嘘だ。

無意識に私は言葉を発していた。

混乱する。私は頭を抱えた。

なんで、どうして。

ずっと欲しがっていた愛なのに、今は混乱してしまう材料でしかなかった。

「や、だ。

嫌だいやだいやだいやだいやだいやだいやだつ！！！！！！
死にたいのに！！もう今更愛してほしくなんてないのに！！
独りにしておいてほしいのに……！！」

叫んで、へたり、崩れおちた。

ぐるぐるぐるぐる。混乱する。また回ってる。また転がってる。

わけがわからない。世界はひどい。

孤独のままがいいのに。死にたいのに。

「嘘だ。」

その言葉とともに、座ったまま再び抱きしめられた。

「…嘘じゃなくても、俺は君に生きてほしい。」

俺は君を愛したい。
俺は君と一緒にいたい。」

好きだよ。

そう囁いた、アルフレッド。

気付けば、震える手で、私も抱きしめ返していた。

——ずっと転がり続けてきた坂道。

ぴたり。転がるのが止まる。

顔を上げれば、彼が手を差しのべて、微笑んでいた——

「生きてて、いいんですか？」

「うん」

「愛されて、いいんですか？」

「うん」

「愛して、いいんですか？」

「…うん。」

愛してるよ、桜」

ありがとう。どちらともなく、そう言った。

こぼれる涙は、温かった。

もう、転がることはないだろう。

「…もういいかい？」

「…もういいよ」

「そろそろ君も疲れたらうね」

息を、止めるの

今。

そしてまた、生まれ変わろう。

10 (前書き)

やっと10話！

泣き疲れて、眠って、
夢を、見た。

『桜は夢はないの?』

アルフレッドに、そう聞かれたときのことを。

『私は……夢は、ないです』

『うそつき』

『嘘なんてついてませんよ』

『なにかあるはずだろ?』

『……そう言われなくても』

『どんなことでもいいよ』

『……変な人ですねえ』

『変じゃないぞ!』

『……そうですねえ、私の……“夢”、というには、小さいことかも
しれませんが』

『幸せに———なりたいです』

.....。

ねえ、アルフレッドさん。

私は幸せになれるでしょうか。

届かない夢だと思っていたけれど。

私なんか幸せになれないんだろうと思っていたけれど。

今、は。

もしかしたら、って。

ねえ、アルフレッドさん。

幸せに、なりたいです。

「.....幸せにするよ」

きっと。

目を覚ませばアルフレッドが、そう言って微笑んでいた。

エピソード（前書き）

エピソードです。
長かったよ…。

エピソード

「行っちゃうん、だね」

アルフレッドの少し、悲しそうな顔。電車の到着は、3分後。せつかくアルフレッドと付き合うようになったのに、せつかく変わったのに。

私は、また別のところに行かなくちゃいけない。

手に持った荷物が、やけに重く感じた。

「…向こうでも、頑張つてね」
「はい」

今度は、転がってないから。
きつと、うまくいくはずだから。

「メールとか、電話とかするから」
「はい」

「俺はずっと桜の味方だから」
「はい」

「ずっと桜を応援してるから」
「はい」

「つらいんだったら、いつでも抱きしめにいくから」
「……はい」

目を、伏せる。まだ、このむずがゆい感じには、慣れない。
思えばこれが初恋かもしれない。

新しいところで頑張れるだろうか。
笑えるだろうか。

…友は、できるだろうか。

アルフレッドがいないと駄目かもしれない。
また独りになってしまいかもしれない。
まだ私は弱いから。

…でも。

変わりたい。

強くなりたい。
人を愛したい。

「…桜」

「はい」

「俺の名前、呼んで？」

「……アルフレッドさん」

そう言ってから、アルフレッド、と言い直す。
私は唇をかんだ。

離れたくない。でも行かなきゃ。
静寂が続く。泣きそうになった。
でも今泣いたらもう行けない気がした。

気がついたら電車が到着していた。電車の扉が開く。
ぎゅっと荷物を持って、私は顔を上げた。

「…行かない、と」

「…うん」

「いつかまた…戻ってきます」

「…待つてる」

「あなたと出会えてよかった」

「俺もだよ」

私は電車に乗り込む。乗り込むまでも何度もアルフレッドのほうを振り返った。

永遠の別れでもないのに、すごく悲しくて、切なかった。

今までの悲しみとは違う悲しみだった。それは彼のおかげだ。

座席に座って、ガラス越しにアルフレッドを見る。悲しそうに眉を寄せながら笑ったその人に、じわり、涙がにじんだ。

「桜」

彼が私の名を呼ぶ。私は涙がこぼれそうに喉がつかまって声が出なくて、唇の動きだけでアルフレッドさん、と言った。

「大丈夫だよ」

電車の扉が閉まる。発車します、と無機質な声。慌てて私は窓を開け、窓の外に顔を出す。電車がゆっくりと動き出した。ゆっくり遠ざかる彼。ぼろり、ついに涙がこぼれた。

「愛してるよ!!」

彼のそんな叫び声が聞こえて、何度も何度も頷いた。聞こえるはずがなくても、私も愛してます、と何度も何度も繰り返した。

アルフレッドの姿が完全に見えなくなってから、ありがとう、と呟

いて、窓を閉めた。

大丈夫。これからは。

私はもう転がってないから。

愛があるから。

優しい気持ちがあるから。

過去を忘れることはできないけど、
未来は希望にあふれてるから。

さよなら、
ローリング転がる私。

エピソード（後書き）

ありがとうございましたー！

最後に原曲様のURLを載せときます。（良いかどうか分からないので、もし駄目なようならご一報下さると有り難いです。）

ようつべ↓<http://www.youtube.com/watch?v=p6skE28zcIM>
ようつべPV↓<http://www.youtube.com/watch?v=BljBGlt1Q18>
ニコニコ↓<http://www.nicovideo.jp/watch/sm9714351>
ニコニコPV↓<http://www.nicovideo.jp/watch/sm9989443>

ご読了本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5087s/>

ローリングール ―転がる少女―

2011年4月18日21時21分発行